第１章　2018年度京都大学構内遺跡調査の概要

千葉　豊

１　調査の経過

旧・京都大学文化財総合研究センター（2008年４月１日～2019年３月31日）では，吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し，予定地の埋蔵文化財調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果により，発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2018年度には，以下のように発掘調査１件，立合調査７件，資料整理１件をおこなった（括弧内は，図版１および表１の地点番号）。

発掘調査	京都大学外国人宿舎新営（京都市白河街区跡･延勝寺跡･岡崎遺跡）	（第１章，図版１－463）
立合調査	京都大学（北部）ガス管入れ替え工事（北部構内ＢＣ33区）	（第１章，図版１－464）
	京都大学外国人宿舎（百万遍）新営（西部構内ＡＺ20区）	（第１章，図版１－465）
	京都大学（吉田南）総合館ほか高圧ケーブル更新工事（吉田南構内ＡＲ23区）	（第１章，図版１－466）
	京都大学（医学部）外灯新設工事（医学部構内ＡＭ19区）	（第１章，図版１－467）
	京都大学（熊野）キャンパス環境整備（熊野構内ＺＺ16区）	（第１章，図版１－468）
	京都大学（本部）接地線改修に伴う工事（本部ＡＸ30区）	（第１章，図版１－469）
	京都大学（西部）総合体育館躯体その他工事（西部ＡＸ20区）	（第１章，図版１－470）
資料整理	京都大学関田学生寄宿舎新営（京都市田中関田町遺跡）	（第２章，図版１－455）

２　調査の成果

以上のうち，2018年度に整理を終えたものについて，成果を略述する。なお，田中関田町遺跡については第２章，白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡については第３章で成果を詳述しているので参照されたい。

田中関田町遺跡の発掘調査　「名勝清風荘庭園」の東側に隣接する本地点は従来，遺跡指定の範囲外であったが，老朽化した京都大学女子寮の建て替え工事が計画されたため，2017年５月に遺跡の有無を確認するための試掘調査をおこなった。その結果，中世や近世の遺物包含層が良好な形で残存していることが確認されたため，田中関田町遺跡として新たな遺跡登録がなされ，建て替え工事区域全域にわたる発掘調査が実施された。

調査の結果，中世の溝や近世・近代の井戸・野壺・溝・集石・段差，中世から近世まで長期にわたって利用されたと思われる盛土や流路といった遺構とともに，中世の土器・陶

磁器，近世・近代の土器・陶磁器・瓦・ガラス製品などが多数見つかった。

中世における本調査区周辺では，吉田泉殿をはじめとする貴族の邸宅が設けられたことが文献資料から判明しており，それにともなって一帯の開拓などが進められたと想定できる。今回の調査で見つかった中世の遺構である溝や盛土は，こうした開発を裏付ける資料として重要であろう。

今回の出土遺物で注目されるのは，「大攪乱」と名付けた廃棄土坑や表土などから大量に出土した近代の遺物である。これらには,「清風荘」と墨書のある陶片や「京都府立療病院」「府立医大」「京都府立医大附属医院」「京医」「京陶」といった文字をもつ陶磁器などが含まれていた。本調査地点のうち北調査区の東半を除く大部分の区域は，明治40年頃，清風荘を所有する住友家が買い上げ,畑地としていた。大攪乱から出土した多量の近代遺物は，明治44年に始まった清風荘の新造にともなって，前身である清風館で所持していて不要となった器物と考えることができる。清風荘の歴史の一端を明らかにする資料といえよう。

白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査　本調査区は，京都市左京区岡崎成勝寺町に所在する。六勝寺の一つ，延勝寺跡地に比定されるとともに，弥生～古墳時代を中心とする岡崎遺跡の範囲内でもある。ここに岡崎国際交流会館を新設することが計画されたため，2017年７月に試掘調査を実施し遺跡の残存状況を確認したうえで，発掘調査を実施した。

調査の結果，古代末～中世前期の方形石敷土坑・井戸・土器溜・瓦溜，近世の大溝・井戸などの遺構が検出され，下層の流路内からは弥生～古墳時代に編年される多量の土器が出土した。方形石敷土坑は，底面に角材を井桁状に組んで内部を石敷とした類例のない特異な遺構である。延勝寺との関連も含めて，その性格解明が課題となる。

近世の遺構として注目されるのは，調査区西辺で検出された南北方向に伸びる大溝ＳＤ１である。幅３ｍ，深さ２ｍ前後の大規模なもので，丸太や板を組み合わせた護岸や堰状の木組み遺構をともなっていた。文献資料や絵図などとの比較検討の結果，この大溝は宝永の大火（1708年）を契機とした市街化によって岡崎村の西を限る境界溝として整備されたと考えられる。そして幕末期に，加賀藩岡崎屋敷がこの地周辺に設けられたさいには，大溝はそのまま藩邸の西を限る堀として転用されたが，藩邸廃絶から時を経ずに埋められ整地されたことが埋土の状況や出土遺物から推測された。近世から近代にかけて，岡崎村の土地利用がどのように変遷していったかを示す貴重な資料といえる。

なお，今回の報告では近世の遺跡に関してのみ詳述しており，中世以前の成果については次年度の年報で詳細を報告する予定である。